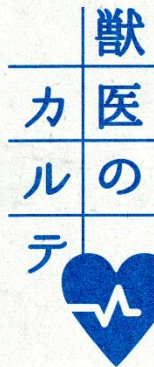


# ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp



40



かんだアニマル  
ホスピタル院長  
(砺波市豊町)  
神田 俊克

気付けば師走。麦茶やキンキンに冷えたビールをグビグビ飲んでいた日も遠くなり、温かな一杯のコーヒーがありがたい、そんな季節が到来しております。そんな中、犬や猫といったペットたちにも、夏の終わりとともに変化が現れているはず。その変化とは「水を飲む量の減少」。動物だって暑ければ何か飲みたい、それはそつですよね。水を飲む量が増えるであれ減るであれ、環境の変化によって引き起こされた反応であれば問題ないのですが、病気が原因で変調を来した結果であることも多いので注意が

## 多飲と多尿



ペットの水の飲み過ぎには注意したい

犬だったら、散歩中やたら大きな水を尿でつくり出したリ、トイレに敷いてあるペットシ

薬の服用など、原因はさまざまです。その中から今日は猫の糖尿病についてお話します。

猫の糖尿病は、すい臓から分泌されるインスリンが足りなくなったり、ホルモンの効きが悪化したりして血糖値が上が

り、さまざま。よく聞くお話としては「なんだか最近、猫の水入れがすぐ空っぽになっている」「うちの子、ご飯の催促ばかりで太らないか心配だったのだけど、なんだか最近痩せてきた」などが挙げられます。何か変だなと感じられた際は、お早めに獣医師にご相談ください。

## 病気のサインの可能性

必要です。犬や猫は、体重1kgに対して1日80〜100ml未満の水を飲み、40〜50ml未満の尿を排せつします。4kgの犬猫なら1日400ml、10kgの犬なら1日1000mlになります。このラインを超えて水を飲むと、尿の量も目に見えて増えてきます。

1ツがぬれていつも以上に重くなっていたりします。猫の場合、トイレの砂があつという間に塊だらけになっています。そういった変化に早く気付くことが、病気の重篤化を防ぐ上で大変重要になります。

多飲と多尿は、腎不全、肝不全、ホルモン失調、糖尿病、ある種ホルモンの異常を引き起こします。遺伝的に病気になるやすい猫が、過度の肥満やすい炎、副腎皮質機能亢進症を発症すると言われていますが、実際の診療において原因ははっきりしないことが多いです。人の糖尿病と同様、終生付き合っていくことになる病気であり、血糖値がコントロールできな